

派遣中学生作文(平成30年度)



美しさの裏にあるもの

網走市立第一中学校三年

館向 頼弥

僕は8月7日から10日までの4日間、僕を含めた網走市の中学生4名と友好都市神奈川県厚木市の中学生4名で、沖縄県糸満市を訪問しました。初日は、糸満市長表敬でした。上原市長は面白く優しい方で、リラックステキな話をすることができました。その後、歓迎会では、シークワソー、ジュースやドラゴンフルーツ、マンゴーなどの沖縄のフルーツをいただきました。糸満市中学生によるエイサー披露の後、エイサー体験をさせてもらい、とても充実した1日でした。

2日目は平和学習をしました。この平和学習は、糸満市派遣4日間の中で、一番衝撃的な1日でした。最初に訪れた平和祈念資料館は、入ってすぐの床が一部ガラス張りになっていて、所々に不発弾が展示してあり、少し怖くなりました。更に進むと、たくさんのお土産が展示してあり、そこには沖縄戦を体験した人たちの生々しい証言がいくつもありませんでした。全て読むことは出来ませんが、沖縄戦は残酷で悲惨なものであると再確認しました。次に、久保田さんという0歳で沖縄戦を経験した方のお話を聞きました。久保田さんは沖縄戦とは「ありつた。久保田さんとおっしやつていました。当時の久保田さんは、母、兄、祖父、祖母と一緒に、降り注ぐ爆弾や銃撃の中を3か月間も必死に逃げ、身を守るためガマに入ろうとしますが、赤ん坊が泣けば米兵に見つかってしまふという理由で中に入れてもらえなかつたそうです。その後行き場のない久保田さん達は、岩陰に隠れながら生き延びたそうです。しかし何日か経った後、突然爆弾が降り注ぎ、久保田さん達は襲われました。久保田さんのお母さんは当時、人の体が降ってきてても感覚

が麻痺していて何も感じなかったと言っていたそうです。その爆弾により、久保田さんのお兄さんは2歳という若さで亡くなられたそうです。久保田さんのお話を聞いた後、実際に戦争で亡くなった方々の名前が刻まれている刻銘碑を見学しました。久保田さんのご家族の名前もこの中に刻まれているそうです。

次にひめゆり平和祈念資料館を見学しました。僕と同じくらい年齢の方が約1000人亡くなったとあり、胸が締め付けられました。その後実際に戦争中使われていたガマに向かいました。中はとても暗く暑かったので、みんなが持っている懐中電灯を消して無言になったときは、周りに人はいるのに一人ぼっちになったように感じ、本当に怖かったです。

3日目は美ら海水族館に行きました。色鮮やかな魚たちや、迫力のある2頭の大きなジンベイザメ、何もかもが感動的でした。その後美々ビーチ糸満に行きました。僕はこれまで海水浴をしたことが無かったので、楽しくて仕方がなかったです。この日が1番沖縄で楽しかった思い出です。

4日目は、ついに最終日となりました。この日行ったのは、首里城公園と国際通りです。はじめに首里城公園に行きました。僕は大阪城に行つたことがあるのですが、建物の造りが全く違いました。城というよりも館のように感じました。肝心の正殿は工事中でした。それでも楽しかったです。

次に国際通りに行きましたが、歩いてみると日本ではないところに来ていたような気分になり、不思議な感じがしました。この4日間は僕の人生に刺激をたくさん与えてくれました。この自然豊かな沖縄も、73年前には戦争があったということがあると感じました。本当に充実した4日間でした。このような機会を与えていただきありがとうございます。

派遣中学生作文(平成30年度)



平和のトライアングル

網走市立第二中学校二年

伊藤 瑠璃

「沖縄戦はありつたけの地獄の戦争」これは沖縄戦を実際に体験した久保田さんの言葉です。ありつたけの地獄、それは私が今まで思っていた「戦争」というものをはるかに超えるものでした。

私は8月7日から10日の4日間、網走市の中学生、神奈川県厚木市の中学生と共に、友好都市である沖縄県糸満市を訪問しました。平和学習の最初に訪れたのは、平和祈念資料館でした。そこには「鉄の暴風」とも言われた沖縄戦の実相が鮮烈に描かれています。その中には、戦争に巻き込まれなくなった子供やお年寄りの写真もありました。どうして罪のない人々が無差別に殺されてしまったのだろう。そう思うととても心が痛みました。

次に私たちは、久保田さんという方から戦争についてのお話しを聞くことができました。その中で「沖縄」は、今の様子とは全く違う悲惨なものでした。容赦なく降り注ぐ爆弾、積み上がったいくつとくさんの死体、米軍による無差別攻撃、想像もしたくないほど恐ろしいものでした。私が久保田さんのお話を聞く中で、とても心に残った言葉があります。それは「戦争は死んでも無念、生きても苦しい」という言葉です。戦時中、赤ちゃんが泣くと米軍に捕まってしまうという理由でガマから追い払われ、赤ちゃんを池に投げ捨てたり、首を絞めて殺してしまう母親が多かったそうです。そんな状況に追い込まれてしまった母親たちはどのような気持であったのでしょうか。

きっと自分の子どもを死なせてしまったとしても苦しかったのだと思います。

最後に私たちが訪れたのは、ひめゆり平和祈念資料館です。そこには、私たちが同じくらいの年で看護補助要員として戦争に巻き込まれた女子生徒達の遺品や体験談などが展示してありました。また、亡くなった学徒たち一人一人の写真も貼られていました。私はそれを見て、こんなにたくさん命を奪っていった戦争を二度と起こしてはいけないうと思いました。

私はこの事業を通してとても良い経験ができました。それは網走市、厚木市、糸満市の「トライアングル交流」を行えたことです。特に北海道と沖縄は日本の中でもとても離れています。また、文化や気候、言葉のイントネーションも違います。ですが、そんな私達でもある共通の願いがあります。1日目に糸満市の上原市長を訪問した際、市長がこのようなことをおっしゃっていました。

「戦争はあってはならない。これは人類共通の願い。みんなが平和とは何か、実現するにはどうすれば良いか考えていかなければならない」

今の日本は、戦争を実際に体験したという人が少なくなってきました。今後は私たちが戦争について考え伝えていく番です。そうすることで「世界の恒久平和」の一步を踏み出すことができる。この事業を通して感じました。

最後になりますが、今回は引率者の福田さん、糸満市役所の職員の皆さんをはじめ、本当にたくさんの方々にお世話になりました。私たちにこのような機会を与えてくださりありがとうございます。ございました。

派遣中学生作文(平成30年度)



糸満市を訪問して思ったこと

網走市立第四中学校二年

井上 晴香 いのうえ はるか

私は8月7日から10日の4日間、市内の中学生4名と、友好都市の神奈川県厚木市の中学生4名で沖縄県糸満市を訪問しました。1日目は市長表敬訪問と歓迎会がありました。歓迎会では網走ではあまり食べることでできない、マンガーやドラゴンフルーツなどを食べました。糸満市の中学生に教えて頂いたエイサーは、小太鼓を回すところと足のタイミングが難しかったです。

2日目は平和学習として平和祈念資料館の見学や轟の壕などの戦跡見学、久保田さんの戦争体験講話を聞きました。その中で特に印象に残っていることが2つあります。まず1つ目は、久保田さんの戦争体験講話です。久保田さんに戦争がどのようなものであったか、実際にどのような体験をしたか、戦争をして人はどうなってしまったのかを教えてくださいました。沖縄戦は、戦争が進むにつれ大人の男性が少なくなり、その代わりに中高生の男子や年配の人までもが兵隊として戦場に出されました。そしてたくさんの方が亡くなりながらも戦争が続きました。久保田さん一家は命を守るため壕の中に隠れようとしたのですが、赤ちゃんや子どもは泣いてしまうので入れてもらえませんでした。壕に隠れるため自分の子どもを殺してしまう人もいましたが、久保田さんのお母さんは子ども2人と生き延びたいと思い、2人を殺さなかったそうです。そうして久保田さん一家は隠れる場所を探しているときに爆弾が落ちてきて、その破片が当時2歳

だった久保田さんのお兄さんに当たり亡くなってしまったそうです。久保田さんの話を聞いて、戦争中の暮らしはとても過酷であったことがわかりました。

平和学習で印象に残ったことの2つ目は、壕の中での体験です。壕の中は足元が安定しておらずとても滑りやすく、天井も低かったです。そしてみんなが持っている懐中電灯を全て消すととても暗くて何も見えず、子どもが泣いてしまうのがわかる気がしました。

3日目は美ら海水族館と美々ビーチに行きました。美ら海水族館には大きなジンベイザメが2匹いてとても印象に残りました。美々ビーチではハーレー体験やバナナボートに乗りました。バナナボートは曲がるときに左側の人全員落ちてしまいました。そのあとみんなで海遊びをしました。

4日目は首里城と国際通りに行き、帰りはモノレールで空港まで向かいました。首里城は日本と言うより中国という感じがしました。

今回の交流事業をとおして考えたこと、思ったことが2つあります。まず1つ目は戦争のことです。沖縄戦でたくさんの方の命が奪われました。久保田さんは「戦争を起すのは人、平和を築くのも人、そして二度と悲惨な戦争のない世でありたい」と話していました。私はこの話を周りの人に伝え、戦争の悲惨さを知って欲しいと思います。2つ目は友好都市の中学生との交流です。日本北端の北海道網走市、南端の沖縄県糸満市、そして中央の神奈川県厚木市の3市で交流出来たことはすごいことだと思います。今後この出会いを大切にして過ごしていきたいです。

派遣中学生作文(平成30年度)



いちやりばちよーでー
〜また会おう〜

網走市立第五中学校一年
遠藤 陽えんどう しょう

「いじめ んじらー ていーひき、ていーぬんじらーいじひき」この言葉を忘れないでください。平和祈念資料館での講話の最後に、僕たちを案内してくれた久保田さんが教えてくれた言葉です。これは沖繩の言葉(黄金(くがに)言葉(くとうば))で、「意地が出たら手を引っこめ、手が出たら意地を引っこめろ」という意味です。この言葉を、73年後の沖繩・糸満の地で教えてもらったことを僕は忘れません。

今回、僕が糸満を訪れたいと思った大きな思いの一つに、この平和学習がありました。久保田さんは当時0歳で、お母さんの胸に抱っこされていていました。そしてお母さんがおんぶしていた男の子は、背中に爆弾の破片が刺さって即死したそうです。その男の子は、久保田さんのお兄さん。お兄さんもお母さんと僕を守ってくれたと、今でも毎日、平和の礎にあるお兄さんの名前が刻まれた礎に「ありがとう」と手を合わせていると話してくれました。

平和の礎には敵味方関係なく沖繩で犠牲になった全ての人の名前が刻まれています。犠牲者の数は沖繩県民の15万人に次いで多いのは北海道民であること知りました。僕たちは網走支庁の碑まで足を運び、手を合わせました。礎の後ろには青く美しい空と海が広がっています。ここが戦いの場であったことを忘れてしまいそうになりました。でも刻まれた約24万人一人一人の名前が、静かに「たくさんの方が亡くなった戦争を二度と繰り返してはならない」と語りかけている様な気がしました。僕のお婆ちゃんのお兄さんは、戦争

で19歳の命を終えました。お婆ちゃんには防空壕で生き埋めになった同級生の話もしてくれました。僕は轟の壕を見学したとき、そのことを思い出し、懐中電灯を1分間消しました。それだけでも怖かったのに、長い人で3ヶ月間も思いでした。心も体も痛めつけられる思いでした。

ひめゆり平和祈念資料館の見学では、僕と同じ年くらいの子が犠牲になったと知り、たくさんの方の並んだ笑顔の写真をみると、この人たちの笑顔が奪った戦争が本当に憎いと感じました。ありったけの地獄の戦争だったと久保田さんは言っていました。

今回もう一つの思いは、糸満市と厚木市の人と繋がり、交流を深めることでした。初日に糸満市役所の方が、トライアングル交流が出来れば良いですねと言っていました。厚木市と糸満市が今年から友好都市となり、3つの市が1つに繋がりました。僕たちはその最初の年です。糸満市の中学生が、7月29日に網走市を訪問した際初めて出会いました。そして8月7日、厚木市の中学生4人と羽田空港で初めて出会った。一緒に糸満市を訪問しました。糸満では網走で交流したみんなが僕たちを温かく迎えてくれました。一緒に行動することでもたくさんの方ができ、仲良くできたことに感謝しています。

最後の夜、美々ビーチで交流会がありました。お別れのとき、ジュニアリーダーの提案でエイサーの掛け声の最後を「いちやりばちよーでー」にすることになりました。「縁があつて出会えば兄弟のようなもの」という意味です。みんなで円になり、手を合わせ、心を合わせて掛け声を言ったとき、また必ず会えると思えました。この交流事業を通して、これからもお互いの市・人々の関係をもっと深めていけると良いです。そして今回出会った人たちと大人になってもずっと友達でいたいです。